

Title	「不登校」の肯定的意味付けの位相： 不登校現象をめぐる社会運動における運動ナラティブの領有
Sub Title	The phases of the meaning construction of "Futoko (school non-attending)" : focusing on the possession of Movement narrative within a social movement
Author	森, 啓之(Mori, Hiroyuki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2008
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.13 (2008.) ,p.79- 92
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20080000-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「不登校」の肯定的意味付けの位相

—不登校現象をめぐる社会運動における〈運動ナラティブ〉の領有—

The phases of the meaning construction of “Futoko (School Non-attending)”

—Focusing on the possession of <Movement Narrative> within a social movement—

森 啓之

1. はじめに

既存の社会学的不登校研究は、不登校経験者やその保護者によって行われる「不登校」への肯定的意味付けを、次のように描写してきた（樋田 1997, 山田 2002 ほか）。それらの論考が描写する不登校経験者や保護者の姿は、不登校している間も不登校をした後も、明るく積極的に過ごすというものである。そして、不登校経験者は、その不登校期間中の自分探しの末に自己実現を果たし、また、その保護者は、自分の子どもの不登校を契機に、社会における学歴主義等を批判的に捉えるようになるという。さらに、それらの不登校経験者や保護者は、自らの積極的な生き方を踏まえて、教育行政等による不登校の管理矯正・治療対象化に反対して、自分たちの正当性を主張するという。これが、先行研究による、不登校の肯定的意味付けの描写である。

それらの先行研究は、そのような不登校の肯定的意味付けを行う代表的勢力として、登校拒否運動をとりあげてきた。登校拒否運動の萌芽は、1970年代に、国立国府台病院の児童精神科医・渡辺位を中心に活動していた、希望会という親の会である。その希望会を契機として、登校拒否を考える会や登校拒否を考える全国ネットワークというかたちで相互連携して、不登校の肯定性を主張してきた。その社会的影響力からみると、不登校を逸脱視する勢力に強力に反対し続けてきた、唯一の勢力といってもよい。

しかし、先行研究が行ってきた描写のみでは、登校拒否運動において行われる、不登校の肯定的意味付けの詳細が、十分に掘り下げられているとは言い難い。先行研究は、同運動を、不登校の肯定性を主張する人々の集まる、一枚岩の存在として描写してきた。しかし、次章で詳述するように、社会運動は、そのように、いつも一枚岩な存在として進展するわけではない。ある社会運動によって立ち上げられた主張に、その運動参加者が共鳴し、それを領有するあり方は、いつも単一であるとは限らず、複数のあり方が存在する可能性もある。先行研究は、この点を、十分に考慮してこなかった。そのため、登校拒否運動において起こる、不登校の肯定的意味付けを、非常に一面的に描写してきた。

以上の先行研究を踏まえ、本論は、登校拒否運動において起こる、不登校の肯定的意味付けを、より精緻に描写したい。そのために、次の2つのことを行う。第一に、同運動によって立ち上げられた主張を掘り下げる。同運動は、児童精神科医の渡辺位の不登校観を基に、運動の内外へ向けて

不登校の肯定性を主張してきたのであるが、まず、その不登校観がいかなるものなのかをみる。それを通じ、同運動に関わる人々が共鳴して、その領有の対象となる、不登校観が明確になる。第二に、そのように登校拒否運動において示される不登校観を、同運動に関わる人びとが、いかに共鳴し、それを領有するのかという点を掘り下げる。その際に、同運動内で、不登校の肯定的意味付けがなされる際に用いられる 2 種類の語をとりあげ、不登校経験者やその保護者が、その語をいかに用いるのかについてみる。その用いられ方の違いをみることを通じて、彼らが、同運動の不登校観に共鳴し、それを領有する際の、幾つかの類型を掘り下げる。そうすることによって、同運動の、不登校の肯定的意味付けの位相を、これまで以上に、精緻に描写したい。

本論の構成は、次のようになる。まず、次の第 2 章で、社会運動研究から示唆を得ながら、登校拒否運動を分析する上で必要な、分析枠組みを整理する。第 3 章では、同運動に言語的資源を与えた渡辺位の不登校観をみる。第 4 章では、同運動に関わる人々が、その不登校観に、いかに共鳴し、それを領有するのかという点に関する幾つかの類型をみる。

2. <運動ナラティブ>と<参加者ナラティブ>という視座

前章で述べたように、既存の社会学的不登校研究は、登校拒否運動を、不登校の肯定性を主張する者たちが集まる、一枚岩の存在として捉えてきた。しかし、社会運動という「場」の担い手は、そのように 1 つのあり方に収斂しない。運動体が示す価値に共鳴し、それを領有するあり方には、幾つかのものが想定される。

この点は、経験的社会運動の実証分析を行う社会運動研究の議論が参考になる。エリングソン (Ellingson 1995) は、個々の社会運動言説を、「社会問題に関する個別的な診断や対策のために構成される、他の主張群と異なる比較的まとまりを持つ 1 つの主張」(ibid. : 107) と捉える。この意味は、運動体によって、運動内の成員や運動外の人々へ示される、言語的資源のことである。このエリングソンの視座は、社会運動を、ある程度、一枚岩の集合体として捉えるものである。

このエリングソンのような視座を、さらに進展させる、ベンフォード (Benford 2002) は、社会運動内の中心的構成員や周辺の構成員という、運動内の立場の相違に照準する。そして、その運動内のダイナミズムを掘り下げる。ベンフォードは、社会運動内における「運動ナラティブ」と「参加者ナラティブ」という分析枠組みを示す。その両者には、個別の運動体に関して、また、その運動体が変革を希求する社会に関する、目標や典型的エピソードが含まれるという。両者を区別するには、運動内の<誰>が語るかに注目する必要があるという。運動ナラティブは、社会運動の中心的構成員により紡ぎ出され、参加者ナラティブは、その運動ナラティブにさまざまなかたちで共鳴し、それを領有する周辺の構成員によって紡ぎ出されるという。運動体の中心的成員は、周辺の構成員の持つさまざまな考え方を、運動体の主張へ沿うように、絶えず 1 つの方向へと方向付けようとするという。

このベンフォードらの議論から得られる示唆は、次の点である。社会運動内で、中心的構成員が示す主張 (運動ナラティブ) に、その運動体の周辺の構成員が共鳴し、それを領有するあり方 (参

加者ナラティブ)には、ある程度の幅が存在する。それは、その主張についての批判や否定というわけではなく、その主張に賛同する場合でも、その賛同のしかたに幾つかのあり方が存在する。言い換えれば、それは、運動ナラティブに共鳴し、それを領有することを通じて形成される参加者ナラティブの、複数のあり方といえる。例えば、アイデンティティ・ポリティクスと呼ばれる反差別運動であれば、運動体は、因習的に否定視されるアイデンティティを、肯定的なものへ書き換えようと試みる。そして、その運動体に共鳴する被差別者が、そのように肯定的に書き換えられたアイデンティティに共鳴し、それを領有する場合に、そのあり方は1つではなく、複数のものが存在し得る。

以上の点を踏まえると、既存の社会学的不登校研究が、登校拒否運動を、不登校の肯定する者たちが集まる、一枚岩の存在として捉えてきたのは、必ずしも妥当ではないといえる。この点を踏まえ、本論は、同運動に関わる人々が、その運動ナラティブに、いかに共鳴し、それを領有して、複数の参加者ナラティブを形成して行くのかということを見る。それを通じて、先行研究が一面的に描写してきた、同運動における、不登校の肯定的意味付けを、より精緻に描きたい。

3. 登校拒否運動の〈運動ナラティブ〉

本章では、登校拒否運動に影響を与えた、渡辺位の不登校観をみるが、中でも、とりわけ同運動に大きな影響を与えた、渡辺の登校拒否の定義をみる。渡辺(渡辺編 1983 ほか)によると、子どもの登校拒否の起因は、転校やいじめ等による学校環境の変化である。そして、それらの学校環境の変化によって、子どもが不安を持つようになり、学校へ行けなくなるという。そして、登校拒否の子どもが持つ、学校へ行けないことへの自責感や周囲からの登校督促が、その子どもへの心理的ストレスになると述べる。さらに、その心理的ストレスが、子どもによる自傷行為やひきこもりを、引き起こすという。渡辺によると、登校拒否への適切な対応は、保護者が、子どもへの登校督促をやめて、自宅を子どもの安心できる場所にすることであり、そうすることで、子どもの心理的安定が得られるという。そして、登校拒否の子どもが目指すべきは、既存の学校への再登校ではなく、不登校の間に、子ども自身のやりたいことを見つけて、個性的な生き方を確立することなのであり、保護者は、それまで持っていた学校信仰を改めて、子どもの登校拒否のために、援助する必要があるという。

渡辺(1987)によると、既存の学校の画一的で集団主義的な教育方法や、社会における学歴主義等の、教育現象をめぐる歪みが、登校拒否の増加の背景にあるという。そして、渡辺は、「登校拒否状態になって、学校に行けなくなってかえってよかった、と考えられるようになったほうがよい」

(渡辺 1987 : 215) と言い、登校拒否の子ども達は、学校へ行けないことへの自責感に苦しむ必要はなく、むしろ、登校拒否を肯定的に受け止めるべきだと述べる。さらに、渡辺は、「登校拒否をする権利をおおやけに認めさせることが大事」(渡辺 1989 : 59) であるとも言い、社会の中で、既存の学校に行く選択肢と同様に、不登校をする選択肢を確立すべきだと説くのである。

以上でみてきた渡辺の不登校観を基に、登校拒否運動の運動ナラティブを、概括的に図式化する

と、「①不登校開始・葛藤 (悩み) →②不登校肯定 (悩み解消)」とまとめられる (以下では、この図式において矢印で結ぶ各部分を「①」、「②」と表記する)。この図の、主に「①」の部分には、既存の学校へのこだわりを捨てて、学校において傷つけられた経験や、不登校への劣等感から来る葛藤を癒すという内容が含まれる。そして、この図の「②」の部分には、「①」の部分で示した過ごし方ができれば、不登校を、主体的に選択すべき肯定的な行動と思えるようになり、不登校期間中に、子どもが自己実現を図り、不登校後の進路へ結びつけられるという内容が含まれる。次章では、このように図式化した運動ナラティブを参照しながら、同運動の参加者ナラティブを掘り下げる。

4. 登校拒否運動にみられる 3 つの<参加者ナラティブ>

(1) 不登校の肯定視に到る上での困難

本章では、前章でみた登校拒否運動の運動ナラティブに、同運動に関わる不登校経験者やその保護者が、いかに共鳴し、それを領有して、それを基に、参加者ナラティブを形成するのかについて掘り下げる。そのために、同運動が発行する不登校体験記を分析する。

その分析に入る前に、不登校体験記が、どのような性格を持つ資料であるのかということについて、簡単に説明したい。不登校体験記とは、登校拒否運動に中心的に関わる人々が、不登校経験者やその保護者の不登校体験談を集めて、編集発行するものである。不登校体験記を編集発行する人々には、渡辺位や奥地圭子、内田良子や、その他の人々が含まれる。彼らは、同運動に中心的に関わり、その声が、同運動内で頻繁に紹介される。したがって、彼らは、同運動内におけるオーソリティーと位置付けることが可能であり、同運動の運動ナラティブを産出する立場にあるといえる。一方、不登校体験記に体験談を寄稿する人々の声は、その渡辺や奥地、内田などと比較して、運動内で頻繁に紹介されることはない。したがって、彼らは、同運動において、渡辺らよりも、より周辺的な者と位置付けることが可能であり、渡辺らが産出する運動ナラティブに共鳴し、それを領有して、参加者ナラティブを産出する立場にあるといえる。

この不登校体験談を、本論の直接的な分析資料とする際に、次の三つの基準を用いて、分析資料の絞込みを行った。第一に、全国から寄せられている体験談が収録されている、15 冊の不登校体験記を収集した²⁾。第二に、その 15 冊に掲載されている各体験談を 1 件と数え、それらの各体験談から、不登校への肯定的意味付けがみられる言明を含む体験談を選び出した。その件数は計 515 件であった。第三に、その 515 件の中から、「不登校してよかった」と「不登校を選択する」という、2 つの語を含む体験談のみを選び出し、それを、本論における直接の分析対象とした。この絞込みの結果、最終的な分析件数は計 102 件であり、その 102 件の中で 59 件に、「不登校してよかった」という語が含まれ、43 件に、「不登校を選択する」という語が含まれた。このように、あえて分析対象となる語を精選し、その語が、各体験談の中で、いかに用いられているのかを掘り下げた。それを通じ、不登校の肯定的意味付けの位相を、精緻に描こうと試みた。なお、その 2 つの語を選んだ理由は、その語が、他の語と比べて、不登校体験記の中で頻繁にみられたためである³⁾。

本章の第 1 節でみるのは、「①不登校開始・葛藤 (悩み) →②不登校肯定 (悩み解消)」というか

たちで図式化した、登校拒否運動ナラティブに照らし合わせると、その「①」から「②」へ至る上での困難に直面し、なかなか「②」へは至れないと吐露する人々が形成する参加者ナラティブである。次に、本章第2節でみるのは、その「①」から「②」へと、不登校を肯定視できるようになった人々が形成する参加者ナラティブである。既存の社会学的不登校研究が描いてきたのは、この第2節でみる者達の姿である。さらに、本章第3節でみるのは、その「①」から「②」へと至ったが、それのみでは現状が説明し難いと吐露し、「②」の“後”について言及する人々が形成する参加者ナラティブである。第1節と第3節でとりあげる姿に関しては、先行研究が焦点をあててこなかった。それらへ焦点をあてること通じて、不登校の肯定的意味付けの位相を精緻に掘り下げることができる。

本節では、まず、登校拒否運動の運動ナラティブの「①」から「②」へ至る上で困難に直面して、なかなか「②」へは至れないと吐露する人々が形成する参加者ナラティブである。このタイプの参加者ナラティブは、計13件存在し、その13件の中で、「不登校してよかった」という語を含む体験談が7件あり、「不登校を選択する」という語を含むものが6件存在した。以下では、具体例を紹介しながら、その特徴を説明したい。

例えば、盲学校に通っていた、ある不登校経験者は、学校や自分の日常生活について悩みが多かったと語る。そして、高校2年から学校に行かなくなったという。その後、盲学校で紹介された精神科医を訪ねたが、病気であると診断されたという。その診断の内容や、自分が学校へ行けないことへの葛藤や、自分の将来についてなど、悩みは尽きないという。そのように辛く嫌な経験ばかりで、登校拒否運動内の他の不登校経験者のように、「学校を休んでよかった」と容易に思えないと吐露する。その不登校経験者は、次のように語る。

まだまだ私にとって つらい いやな体験は山ほどあります。今もそのなかで生きているのです。だから学校を休んでよかったとか学校を休んで成長できたという人の話を聞くことができますが私はとてもそうは思えません。そう思う時など ないとさえ思うのです。……そんな事を考えながらいると私は「不登校」とか「登校拒否」という仲間にはいれるのだろうかという問題にぶつかりました。「病気」として見られるより「登校拒否」「不登校」として見てくれた方が、まだいいからです。……「不登校」と云うのは学校に行く時間には元気がないけれど、あとの時間は家でテレビゲームなどをして元気に過ごしていて……そのほかは「不登校」とは言わなくて病的な状態だと言うのです。ほんとうに、がっかりしてしまうのです。その辺で私の気持ちは割り切れないのです。(石川ほか編 1993 : 672・省略筆者)

ここでは、自分の不登校を肯定的に受け入れる上での困難が語られている。しかし、その一方で、登校拒否運動内で、不登校を肯定視できるようになった、他の不登校経験者のようになりたいとも語られる。その理由は、「病的な状態」よりも、「元気」なイメージのある「不登校」の方が、「まだいいから」だという。この不登校経験者は、他の不登校経験者の置かれた状況と、自分の置かれた

状況とを比較して、彼らへの仲間入りが可能かどうかということについて葛藤を持つと吐露する。

このタイプの参加者ナラティブを、「①不登校開始・葛藤（悩み）→②不登校肯定（悩み解消）」というかたちで図式化した、登校拒否運動の運動ナラティブと照らし合わせて説明すると、この参加者ナラティブでは、「①」と「②」の間を揺れ動き、「②」へと到る希望を持ちながらも、その過程で直面する困難について言及されている。この参加者ナラティブを語る人々にとって、不登校を肯定視するようになる状態の「②」が、自分の拠り所にはなっていない。そして、「学校を休んで成長できたという人の話を聞くことができますが私はとてもそうは思えません」と言い、他の不登校経験者の状況と自分の状況を対比しながら、「②」へ至ることが、いかに困難なことであるかということを強調している。

そのような他者の状況と自分の状況との対比については、次に引用する、不登校する子どもを持つ、ある保護者の語りに、よりはっきりとみてとれる。

いまから 3 年まえ、国立国府台病院……へ通院するようになって、……私が登校拒否のことでかかわった施設は、そこが最初で最後です。あちこち渡り歩いてふりまわされなかったのが、とても幸運でした。……（子どもの登校拒否について）地域から「学校に行かせない親」として批判の目が向けられたりもします。……拒食症・家庭内暴力・神経症・退行・とじこもり、ひとつのことへの強いこだわりなど……これらのことは、登校拒否の二次症状だということで紹介されたり、専門家が理論的な文章であれこれと書いたりしています。……そのような理屈っぽい本を読んで、親が「ふん、なるほど」と思っただけでは解決できないことが登校拒否にはいっぱいあるのです。……これからも登校拒否はふえるでしょう。そして、いままでよりも、自分からあえて学校へ行かないことを選ぶ、元気な不登校もふえるでしょう。そのかげで、やはり苦しむ登校拒否も多いと思います。……大人の目で見えた理論で子どもをふりまわしてはいけないと思うのです。（『ひと』編集委員会編 1989：172-173・括弧内省略筆者）

ここでは、この保護者自身の気持ちの中では、自分の子どもの不登校を肯定的に受け入れられる可能性があるとしても、自分の住む地域の近隣の人々から、差別的まなざしが向けられるために、不登校を肯定視することが容易ではないと語られる。また、子どもが不登校開始後に直面する拒食症等の苦しみは、本を読んだり体験談を聞いたりするだけでは、実感として理解できないものであるとも語られる⁴。さらに、登校拒否運動内の他の不登校経験者のように、「あえて学校へ行かないことを選ぶ、元気な不登校」も存在するであろうが、そうではなく、拒食症等に苦しみ続け、不登校を肯定視できるようになれない子どもも多いのであり、そういう子どもの存在を、もっと考慮すべきではないかと語られる。

さらに、この保護者は、この引用文の続きの部分で、不登校に関するマスコミ報道にも言及する。そして、不登校を差別的に扱う報道は、少しずつ減りつつあるが、今度は、逆に、不登校経験後に自分の希望した進路に進んで、前向きに過ごす「よい登校拒否」（ibid.：173）と、家庭内暴力やと

じこもりに苦しむ、「悪い登校拒否」(ibid. : 173) というかたちで、不登校経験者内で差別化されつつあるのであり、その点に関する危惧を示す。

このタイプの参加者ナラティブには、次のような特徴がみられる。「①不登校開始・葛藤(悩み)→②不登校肯定(悩み解消)」という運動ナラティブの、「①」と「②」の間を揺れ動き、自分は、未だに、不登校を肯定視するようになる「②」の状態へと至っていないと語られる点は、最初に引用した不登校経験者の語りと同じである。しかし、「学校へ行かないことを選ぶ、元気な不登校」と「そうではない子ども」という表現や、「よい登校拒否」と「悪い登校拒否」等の表現に、不登校を肯定視できるようになれない自分の状況と、既に不登校を肯定視できるようになった他の不登校経験者との対比がみてとれる。そのようなかたちで、自分の状況と他者の状況との差異が言及されている。この語りは、本節で分析対象とした13件の体験談の中で8件に含まれた。

本節でみた、運動の担い手による、葛藤や困難、苦しみをめぐる語りについて、高橋(1994)は、次のように指摘する。高橋は、それを、運動参加者による「傷み」(ibid. : 143)の語りとして説明する。そして、そのように「傷み」を語ることは、単なるカタルシスに過ぎない場合や、同じ状況を共有しない他者との間で衝突が起こる場合もあるという。しかし、その一方で、あえて「傷み」を語り続け、他者との衝突を繰り返すことにより、そのことが、既に社会運動内で規範化された主張や慣習の再構築へとつながる場合もあるという。高橋は、その点に、「傷み」を語ることの意義を見出す。

高橋の議論を、運動ナラティブと参加者ナラティブの視座に引き寄せて考えると、本節でみた参加者ナラティブは、登校拒否運動の運動ナラティブを産出する人々からみると、「②」の不登校の肯定視へと至れない人々の語りである。それは、同運動にとって、いかなる意味を持つのであろうか。

その点は、ベンフォード(Benford 2002)が指摘する、社会運動内の「ナラティブ・コントロール」の存在がヒントになる。社会運動には、運動ナラティブが参加者ナラティブを方向付ける面(ナラティブ・コントロール)が存在し、それを通じて、運動体の主張が劇的に拡散せず、まとまりを持ったかたちで存立できると述べる。しかし、それは、必ずしも積極的な意味を持つだけのものではないとも指摘する。ベンフォードが、負の側面として挙げるのは、例えば、効果的で適切なメディア対応のために選ばれた一握りの「代表者」(ibid. : 68)の存在や、市民的不服従活動の禁止事項が記された運動内マニュアル(ibid. : 66)の存在、運動体の規範を侵した一部運動成員へ向けられる他成員からの罰則的な「冷遇」(ibid. : 67)の存在等である。また、このように露骨なかたちでのコントロールではなくても、中心的構成員は、絶えず、周辺の構成員の考え方を方向付け、そのようなかたちで、社会運動内の運動ナラティブの正当性が保たれると指摘する。

登校拒否運動の「①不登校開始・葛藤(悩み)→②不登校肯定(悩み解消)」という運動ナラティブにおいても、本節で引用した体験談内で言及される葛藤や苦しみは、主に「①」の部分に含まれている。同運動の運動ナラティブでは、それらは、「②」に至ることで克服できるものとされている。言い換えれば、運動ナラティブを産出する側の人々からみると、その不登校経験者が吐露する葛藤や苦しみは、最終的に「②」へと至って解決されるべきものなのである(ナラティブ・コントロー

ル)。

特に、登校拒否運動は、運動の内外へ向けて、不登校の肯定性を主張し続けてきたのであり、その主張を説得的なものにするための戦略としても、不登校経験後もいきいきと生活する者達の姿を、運動の内外に対して示し続ける必要がある。しかし、本節で引用した不登校経験者の語りからも分かる通り、同運動内の一部の人々からは、運動ナラティブの「②」へと至るのは、それほど容易ではないと吐露される。その点に、運動ナラティブを産出する人々と、それを領有して参加者ナラティブを形成する一部の人々の間の、ズレが顕在化しつつあるといえる⁵⁾。

しかし、その一方で、このタイプの参加者ナラティブは、登校拒否運動内で、ある問題提起を引き起こす契機にもなり得る。その問題提起とは、「①」における不登校開始後の葛藤や苦しみという状況から、必ずしも、「②」の不登校の肯定という状況へ至る必然性があるのであろうか、というもののや、もっと異なる内容の運動ナラティブも可能なのではないか、というものである。そして、そのような運動ナラティブと参加者ナラティブの間のズレを経て、「①」から「②」へと進むことが自明とされてきた、同運動の運動ナラティブの再構築の可能性がみえてくるのである。

(2) 不登校の肯定視への到達

本節では、不登校の肯定視へと至った人々の参加者ナラティブをみる。既に述べたが、既存の社会学的不登校研究が描いてきたのは、この不登校の肯定視へと至った者の姿である。それらの先行研究で、既に描かれているため、本節では、この参加者ナラティブを、詳細に描写することは控えたい。以下で具体例を紹介しながら、その特徴を簡単に述べる。

このタイプの参加者ナラティブは、計 77 件存在し、その中で、「不登校してよかった」という語を含む体験談が 44 件あり、「不登校を選択する」という語を含むものが 33 件存在した。例えば、当時不登校していた者は、その不登校について、以下のように語る。

(学校に行けなくなって) 行く所もやることもなくなり、絶望の淵に立たされ……私が始めてシューレに行ったのは「登校拒否を考える会」に母が行った時。……それまで非常に暗かった私が……シューレに一步入った瞬間、自分が元に戻った……『「二十一世紀」何をしているんだろう?』と、フツと考えることがある。……ボランティアを体験してるか?……自分の未来を、自分で占ってみるのも、なかなか楽しいと思う。一番やりたいのは……ミュージシャンかな?……今思うと、現在辿っている道で、私は良いと思った。そう思うと、最後に私は、こう叫びたい。「学校を辞めて、よかった!!」(東京シューレの子どもたち編 1995 : 173-178・括弧内省略筆者)

ここでは、中学校 2 年から不登校を開始したことや、学校に通っている頃のいじめや教員の差別的態度をきっかけに、既存の学校を想起させるものに嫌悪感を持つようになったと語られる。その後、自分の不登校への劣等感等のために、「絶望の淵に立たされ」るような葛藤に苛まれたという。

しかし、母親の勧めもあり、登校拒否運動に属するフリースクールに通うようになり、不登校を否定視しない考え方に出会ったという。また、そこでの活動を通じて、不登校を肯定的に受け入れて、自分の将来を思いめぐらせるようになったという。そして、既存の学校に通うことと比べて、不登校は選択すべき有意義なことであると語る。

このタイプの参加者ナラティブを、「①不登校開始・葛藤（悩み）→②不登校肯定（悩み解消）」という、登校拒否運動の運動ナラティブと照らし合わせながら説明すると、この参加者ナラティブは、「①」から「②」へと、流れるように展開し、不登校を肯定視するようになる「②」の状態になったことが語られる。この参加者ナラティブを語る人々にとって、「②」における不登校の肯定視は到達可能なものであり、それが、自分の拠り所となっており、運動ナラティブと自分の経験の間に、ズレを感じない人々の語りである。

前節では、運動ナラティブの「①」から「②」へ至る上での困難に直面し、なかなか「②」へは至れないと吐露する人々の参加者ナラティブをみた。その彼らが、自分の置かれた困難な状況を語る際に、その自分の状況と対比しながら、「学校へ行かないことを選ぶ、元気な不登校」（『ひと』編集委員会編 1989：173）等と言及していたのは、本節でみた参加者ナラティブを語る人々である。また、本節でみた参加者ナラティブは、登校拒否運動の運動ナラティブとの関係でみても、その運動ナラティブと共通する内容となっており、その両者の間にズレは存在しない。したがって、ナラティブ・コントロールが必要とされない、登校拒否運動にみられる、模範的な参加者ナラティブといえる。

（3）不登校の肯定視に至った“後”の顕在化

本節では、不登校を肯定視するに至ったが、それのみでは現状が説明し難いと吐露して、そのように肯定視することの“後”について言及する人々の参加者ナラティブをみる。このタイプの参加者ナラティブは、計 12 件存在し、その 12 件の中で、「不登校してよかった」という語を含む体験談が 8 件あり、「不登校を選択する」という語を含むものが 4 件存在した。以下では、具体例を紹介しながら、その特徴を説明したい。

例えば、ある不登校経験者は、以前は、自分にとって、不登校は有意義で選ぶ価値のあるものであったし、「登校拒否になってよかった」（石川ほか編 1996：65）とも思っていたのだという。しかし、その後、その思いに変化が生じたという。その不登校経験者は、その点について、次のように語る。

「登校拒否をしたくても、出来なかった。した人がうらやましい」とおっしゃるみなさん、なったらなっただで大変なんです。一〇年以上過ぎていても、学校とは関係のない年齢になっても、迷いでいっぱい。一生、つきまといますよ、これは。いろんな思いに、どう折り合いをつけるか、今後の大きな課題です。……登校拒否にさえならなければ、知らずに済んだ痛みなんてたくさんある。でも、だからこそ、知った喜びもある。それはそうだけど、結果論です

よ、こんなの。……(登校拒否に)なってよかったなんて、単なる思い込みだから……。よかったかどうかなんて、天寿をまっとうする瞬間に思うこと。確かに、その時々で、必要かつ大切な思い込みはあるけれど、一生そのままではいられない。ペースは変わらなくても、考え方は年々変わっていくものだ。そう思ったら、少しだけ、楽になった。それにしても、今の私に、必要かつ大切な思い込みって、何だろう……。大急ぎで書いたので、一年分の思いのすべてを書くことはできなかったけど、九年後、「二〇年後の思い」というものを、書いてみたい。(石川ほか編 1996 : 66-67・括弧内省略筆者)

この不登校経験者は、当初は、自分の不登校経験を肯定的に受け入れていたという。その意味では、いったんは、不登校を肯定視できるようになったとみなすことができる。この不登校経験者によると、不登校後も演劇活動等を続けるが、それも思うように行かず、他にも将来の悩みを抱えるようになったという。そのために、不登校を肯定的に見なす周囲の人々からの言葉に対しては、「一〇年以上過ぎてても……迷いでいっぱい」と応えるのである。ただ、注目すべきなのは、この不登校経験者が、自分の不登校経験を、単に後悔しているわけでもない点である。既に述べたように、この不登校経験者は、いったんは、不登校を肯定視できるようになったのである。そして、いまだに、その思いを残しながらも、その思いだけでは、自分の置かれた現状が、うまく説明できないと吐露している。そのために、今後の人生へ向けた「必要かつ大切な思い込み」に思いをめぐらすのである。

このタイプの参加者ナラティブを、「①不登校開始・葛藤(悩み)→②不登校肯定(悩み解消)」という、登校拒否運動の運動ナラティブと照らし合わせながら説明すると、この参加者ナラティブでは、いったんは運動ナラティブの「②」に到ったと語られている。しかし、前節でみた参加者ナラティブと異なり、「②」に至ったというだけで、その語りが終わっていない。本節でみる参加者ナラティブでは、「①」から「②」へと至ったが、そのみでは、その語り手の置かれている現状が、うまく説明できず、「②」の“後”へ向けた探求が開始されているといえる。そして、そのようなかたちで、同運動の運動ナラティブからのズレが表出し始めているのである。

また、本節でみる参加者ナラティブには、別の特徴もみられる。その点は、不登校する子どもを持つ、ある保護者の、次のような語りに、はっきりとみてとれる。

最初我が子二人の登校拒否は、私の一生でこんな辛いことはないと思ったりしたものでした。目前に苦しむ我が子の姿、世間の目、これをクリアしなければならないとするなら、絶対に「良かったこと」に変えなければやっていられない。世間よ、学校よ、登校拒否の我が子と向き合ったおかげで私はこんなに素敵な人になったと思わせてやると、ギンギンにつっぱっていました。我が子を理解することはそうでも思わなければできそうにないほど辛いことに思われました。今まで世間と違うことはいいことと思いながらも、つい世間の要求に合わせた方がいいのではと揺れていた私でした。しかし我が子の登校拒否という現実を目の前にもう揺れているこ

とはできませんでした。居直るしかありません。しばらくそうしているうちに自分が納得すれば世間の目なんてどっちでもいいと余裕もできました。私は私らしく、頑張りすぎず、納得できることを見極めて生きていこうと思えるようになりました。私が私らしくしているほうが家族も居ごちがいいと気がつきました。……他の多くの自分と違う生き方をしている人の人生に興味を持ち、素直に認めることができるようになりました。誰でも生きてること、それだけで大変な、すごいことなんだと思えるようになりました。……私の世界は広がり、シンプルになったのです。(石川ほか編 1995 : 108)

当初、この保護者にとって、不登校に苦しむ子どもに関する悩みや、その子どもの不登校に関連して、周囲の人々から向けられる否定的なまなざしを乗り越えるために、不登校への否定視を捨て、不登校を肯定的に受け入れようとした。そして、子どもの不登校を通じて、自分自身の価値観も変化し、自らも成長できたと、周囲に証明しようと努力していたという。しかし、その一方で、子どもの不登校に関して、「よかった」と思わないでは、乗り切れないことであったとも語られている。そして、その後、自分の置かれた状況について、「居直る」という気持ちを持てるようになり、周囲の人々からの否定的なまなざしも、以前ほどは気にならなくなったという。そして、そのような経験を経てから至ったあり方が、「私は私」というものであるという。

このタイプの参加者ナラティブを、「①不登校開始・葛藤(悩み)→②不登校肯定(悩み解消)」という、登校拒否運動の運動ナラティブと照らし合わせながら説明すると、いまみた参加者ナラティブでは、「①」から「②」へと至ったが、そのみでは、その語り手の置かれている現状が、うまく説明しきれず、「②」の“後”への探求が開始されている。その点に関しては、本節で最初に引用した不登校経験者の語りと共通する。しかし、その語りと異なる点は、「②」の“後”への探求の際に、「私は私」というあり方が、見出されつつあることである。そのようなかたちで、同運動の運動ナラティブからのズレが表出し始めているといえる。この「私は私」という語は、本節における分析件数の12件のうちの9件にみられた⁶⁾。

このタイプの参加者ナラティブは、前々節でみた、「傷み」(高橋 1994 : 143)を基調とする参加者ナラティブとは異なる。前々節でみた参加者ナラティブは、さまざまな困難や苦しみのために、不登校の肯定視に至れないという内容であったが、ここでみた参加者ナラティブでは、そのような意味での困難は語られていない。むしろ、ここでみた参加者ナラティブには、登校拒否運動の運動ナラティブが十分に示していない「②」の“後”を、語り手自身が補いながら語って行こうとしている面がみられる。そして、「②」とは異なる、「私は私」という自分の拠り所を見出そうとする姿がみられる。それは、その語り手が、自分の不登校経験や自分の子どもの不登校経験を語りながらも、「①」や「②」の頃に持っていた、「不登校」というカテゴリーへの強いアイデンティフィケーションから、部分的に解放され始めている状況といえる。ここでみられるのは、不登校経験を語りながらも、その経験を語る契機となった「不登校」というカテゴリーから少しづつ距離を置きつつあるような状況であり、そのような意味で、語り手の自己の多元性が垣間見えている状況とはい

えないであろうか。

ベンフォード (Benford 2002) は、参加者ナラティブは、絶えず運動ナラティブによって方向付けられるだけの存在ではないという。運動体の中心的成員が、周辺の構成員の経験へ意味付けを行う際に、そこでなされる意味付けは、いつも一方的なものではなく、周辺の構成員からの応答が返される場合もあるという。その応答の内容が、運動体にとって不利益にならず、運動体にとって、何らかの積極的意味を持つ場合は、運動体の主張に組み入れられる可能性もあるという。以上でみた「私は私」というあり方は、その語り手の自己に、多元性を持ち込んだように、登校拒否運動の運動ナラティブにも、何らかの影響を与える可能性がある。例えば、それは、同運動が、「不登校」というカテゴリーをめぐって出発した運動体でありながら、「不登校」以外の 이슈をめぐって、「私は私」というあり方を持つ人々との連帯を、模索することになる契機となるかもしれない。

5. おわりに

本論では、登校拒否運動を、運動ナラティブと参加者ナラティブという視座から掘り下げてきた。第 3 章で、同運動の運動ナラティブを「①不登校開始・葛藤 (悩み) →②不登校肯定 (悩み解消)」というかたちで図式化した。その運動ナラティブは、「②」を基調とする、不登校の肯定性の主張に基づいていた。第 4 章では、その運動ナラティブに共鳴し、それを領有する人々の語る、3 つの参加者ナラティブをみた。そして、そこに、不登校の肯定的意味付けの位相を見出した。

先行研究は、「②」に至ることができたという参加者ナラティブを語る者達の姿 (第 4 章第 2 節) のみをとあげてきた。しかし、登校拒否運動において行われる、不登校の肯定的意味付けは、そのように一面的には描写できず、これまで描かれてこなかった、次の 2 つの位相も存在した。その 1 つは、「②」に至る上での困難を吐露する人々が語る参加者ナラティブ (第 4 章第 1 節) であり、もう 1 つは、「②」に至ったが、そのみでは現状が説明し難く、その「②」の“後”を探求する人々の語る参加者ナラティブ (第 4 章第 3 節) であった。そして、その 2 つの参加者ナラティブと、同運動の運動ナラティブとを比較したときに、ズレが顕在化した。そのズレは、登校拒否運動の運動ナラティブと参加者ナラティブの間の、相互の批判・否定と捉えられるようなものではない。運動ナラティブからのズレを持つ参加者ナラティブを語る人々は、運動ナラティブが示すようなあり方に、自らの経験を重ね合わせようとしたが、それが、部分的には不可能であったために、それがズレとして表出した。そのズレの表出を通じて、同運動の中心的な担い手と、周辺的な担い手の間の、ダイナミックな相互関係の一端も浮かび上がった。

【註】

- 1) 登校拒否運動は、1970 年代から、30 年以上に渡って活動しているが、同運動の運動ナラティブが、活動開始当初から現在に至るまで、渡辺位の不登校観を基礎としている点に変化はない。この点は、同運動に属する全国不登校新聞社が、同運動に賛同する人々向けに発行する不登校新聞という媒体の 2007 年に発行された

全ての号等を参考にした。

- 2) 紙数の関係上、収集した15冊の不登校体験記のうち、本稿で直接引用した資料のみを、文末の文献一覧に掲載した。なお、その15冊の不登校体験記は、1983年から2001年の間に出版されたものであった。
- 3) 「不登校してよかった」という語の分析対象の件数には、「学校に行かないでよかった」や「学校をやめてよかった」などの語を含む体験談も含めた。また、「不登校を選択する」という語の分析対象件数には、「不登校を選んだ」や「学校に行かないことを選択する」などの語を含む体験談も含めた。
- 4) ここで引用した資料で、保護者が「登校拒否の二次症状」と呼ぶのは、渡辺位の登校拒否定義に含まれる概念を指す。渡辺(1983)は、学校環境の変化によって子どもが持つ不安を総称して、一次的な症状化等と呼び、登校拒否の子どもが、自らが学校へ行けないことに自責感を持ち、それを起因として行う自傷行為等を、二次的な症状化と呼ぶ。
- 5) この点に関しては、過去に登校拒否運動に参加し、同運動の運動ナラティブを、同運動の集会等で語ってきた不登校経験者が、次のように述べる(常野ほか 2005)。その不登校経験者は、ある集会で、運動ナラティブの「①」から「②」へ進む上での困難を吐露する、他の不登校経験者に、自らの経験を踏まえて、「②」に至ることは可能であると言って詰め寄ったという。彼は、自分のその行為を通じて、「②」へ進む上での困難を吐露する他の不登校経験者の持つ考え方を、運動ナラティブに沿うように、強引に変更させてしまったと言い、そのことに対して、後悔したと述べる。
- 6) このタイプの参加者ナラティブで、「不登校を選択する」という語が含まれるものは、例えば、笑う不登校編集委員会編(1999:191-202)における、保護者の語りにみられる。

付記：本稿は、日本教育社会学会第59回大会(2007年9月23日・於茨城大学)で報告した内容をもとに、大幅な加筆修正を行ったものである。その報告に対して、貴重なご意見を下さった皆様に、深く感謝させていただきたい。また、本稿は、平成19年度大学院高度化推進研究費助成金(学生分)の研究成果の一部である。同助成金による補助に関しても、深く感謝させていただきたい。

【文献】

- Benford, R. D. 2002, "Controlling Narratives and Narratives as Control within Social Movements," J. E. Davis, (eds.), *Stories of change : narrative and social movements*, State University of New York Press, 53-75.
- Ellingson, S. 1995, "Understanding the Dialectic of Discourse and Collective Action : Public Debate and Rioting in Antebellum Cincinnati" *American Journal of Sociology* 101-1 : 100-144.
- 樋田大二郎, 1997, 「不登校を克服することで一段と成長する 登校の正当性をめぐる言論のたたかひ」今津孝次郎・樋田大二郎編『教育言説をどう読むか 教育を語ることばのしくみとはたらき』新曜社, 185-206.
- 『ひと』編集委員会編, 1989, 『登校拒否 : 学校の呪縛を解く』太郎次郎社.
- 石川憲彦ほか編, 1993, 『子どもたちが語る登校拒否 402人のメッセージ』世織書房.
- 石川憲彦ほか編, 1995, 『親たちが語る登校拒否 108人のノンフィクション』世織書房.

- 石川憲彦ほか編, 1996, 『若ものたちが語る登校拒否 63 人の経験』世織書房.
- 東京シューレの子どもたち編, 1995, 『僕らしく君らしく自分色 登校拒否・私たちの選択』教育史料出版会.
- 高橋準, 1994, 『自分を・語る・ことば』——〈個〉に根ざす運動の姿』一橋大学一橋学会編集『一橋論叢』
第 112 巻第 2 号, 日本評論社:134-148.
- 常野雄二郎ほか, 2005, 『不登校、選んだわけじゃないんだぜ』理論社, 128-146.
- 笑う不登校編集委員会編, 1999, 『笑う不登校 こどもと楽しむそれぞれの日々』教育史料出版会.
- 渡辺位編, 1983, 『登校拒否 学校に行かないで生きる』太郎次郎社.
- 渡辺位, 1987, 「生命の側から子どもをとらえる」登校拒否を考える会編『学校に行かない子どもたち 登校拒
否 新しい生き方の発見』教育史料出版会, 201-217.
- 渡辺位, 1989, 「てい談 居場所さえあれば、子どもはみずから育つ」『ひと』編集委員会編 1989『登校拒否：
学校の呪縛を解く』太郎次郎社, 48-60.
- 山田哲也, 2002, 「不登校の親の会が有する〈教育〉の特質と機能 不登校言説の生成過程に関する一考察」『教
育社会学研究』第 71 集, 東洋館出版社:25-45.

(もり ひろゆき 慶應義塾大学大学院社会学研究科)